1620~30年代にハルハ・セツェン・ハーン部に 服属した漠南モンゴル諸部

姑茹玛(グルマー)

はじめに

16世紀末~17世紀初、東北アジアの政治情勢に重大な変化が発生した。"白山黒水"の間に興起した女真――満洲人がアイシン国(1616年に建州部の首領ヌルハチが建て、1636年に清と改称)を創建し、力の限りを尽くしてモンゴル各部を経営した。先後して、漠南の左翼モンゴル諸部と、あるいは連盟し、あるいは自らに服属させて、モンゴル大ハーン・リンダン(Liydan qayan. 在世1592~1634年、在位1604~1634年)を孤立させた。漠南左翼モンゴル諸部を悉く失った後、リンダン・ハーンは1627年末に西征し、漠南右翼モンゴルの住地を根拠地として、再び左翼諸部を経営した。リンダン・ハーンの西征(左翼で行った併合活動を含む)は、諸部を臣属させる目的を果たせなかったのみならず、逆に諸部の離間を激化させ、各部の情勢を動揺させた。1627-1628年間に、右翼諸万戸も次々と瓦解した。まさにこの時において、戦乱から逃避するために、チャハル(Čaqar)、アバガ(Abay-a)、アバハナル(Abaqanar)等の諸部の大量の属民がハルハ領内へ逃がれ、左翼で最も勢力を具えた人物――ショロイ・セツェン・ジノン(Šoloi sečen jinong)に身を寄せた。

漠南モンゴル諸部がショロイに身を寄せたのは、あるいは彼と姻戚関係があり、あるいは牧地が隣接しており、あるいは単に戦乱を避けるためであった。しかし、形勢の変化により、彼らのうちの多くは、また南遷してアイシン国に帰順した。彼らが移動を繰り返したことは、動乱が続く当時のモンゴル政局、および満洲・モンゴル関係の発展変化を反映しているばかりでなく、同時に、ハルハ部族の形成、満洲・モンゴル・チベット関係の方面においても、深く、かつ、継続的な影響を与えた。

本稿では、満洲・モンゴル・漢・ロシア文史料、および、モンゴル国の学者によるフィールド調査史料を用いて、1620~30年代にセツェン・ハーン部に帰順した漠南モンゴル諸部に対して一考察をなし、この重大な歴史事件が生じさせた深い影響を帰納・総括することを試みた。

1. 姻戚関係のある部族

周知の通り、チンギス・ハーン諸弟の後裔の相互間、および、彼らとダヤン・ハーン (Dayan qayan、在位1479~1516年) の後裔との間は、姻親タイジ (uruy tayiji) と称し、代々にわた

アルタン・ウルク

る婚姻が保持されていたが、ダヤン・ハーンの後裔、黄金家族の内部は、兄弟タイジ(törül tayiji)と称し、嫁娶が厳禁されている。当該の制度が出現した確実な時期は、現在、明らかでないが、ダヤン・ハーン執政以後の事であると肯定することができる。

ダヤン・ハーン裔の諸部の黄金家族の婚姻を綜合的に観察すると、彼らは、"オンニョード (Ongniyud)" あるいは "アバガ"と称されるチンギス・ハーン諸弟の後裔との間の代々にわたる婚姻を、既に、一種の慣例あるいは当時の風潮としていた。これは、当時、真の家柄・身分がつり合った婚姻と認識されていたと思われる。"オンニョード"、"アバガ"の諸部は、名義上、すべてモンゴル大ハーンの管轄に属していたが、実際のところ、各自は一つの部をなしていた。彼らは代々にわたり婚姻したダヤン・ハーン裔の諸部と密接な結び付きを保持し、さらには、ある部族は彼らに従属し、その統轄を受け入れた。一部のアバガ、アバハナル、モーミンガン (Muumingyan / Mayumingyan) 人は、セツェン・ハーン部との関係が、まさにこのようであったのである。

1.1.モーミンガン

モーミンガンはアル・モンゴル (北モンゴル) 「に属し、チンギス・ハーンの弟ハサルの十五世孫ドルジ・ボヤント・ハーン (Dorji buyantu qaγan) が続轄したオトグであり、フルンボイル、オノン河からネルチンスクに至る地方で遊牧していた。17世紀初に至るまで、ハサル裔の諸部落のうち、ただモーミンガン部の統治者のみ、"ハーン"号を有していた。天聡8年、モーミンガン部はアイシン国に帰順した。しかし、アイシン国に帰順したのは、ホルチン・ハーン王家に所属していた部衆の一部(1942戸)であり、そのほかの多数は、みな、もとの牧地に留まり、大部分はアル・ハルハ・ハン国の属民になり、一部は後に帝政ロシアの属民になった²。順治初、清朝は四子(Dörben köbegüd)、オラド(Urad)、モーミンガン等の部を続々と西へ移し、牧地を次第に陰山北麓地域に落ち着かせ、オラーンチャブ盟各部の主体を形成した。

セツェン・ハーン部で最初にハーンに任じられたショロイの祖父アミン・ドラル (Amin durqal) は、モーミンガンの貴族ダラ (Dara) の娘を娶った³。ダラはハサル裔の宗主オルトハイ・ボヤント・ノヤン (Urtuqai Buyantu noyan、ハサルの十三世孫) の息子であり、ホルチ

¹ 大興安嶺の山陽、ケルレン河下流一帯に遊牧していたチンギス・ハーン諸弟の後裔に所属していた部落の総称。

² 詳しくは、玉芝「**蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究**」(2006年内蒙古大学博士学位論文) 82頁を参照。

³ 詳しくは、姑茹**玛**「**喀尔喀车臣汗硕全家族及其姻亲**」(*Quaestiones Mongolorum Disputatae*, Association for International Studies of Mongolian Culture. 第五輯、東京、2009年107-115)を参照。

ンのモーミンガン部に属した。メルゲン・ゲゲーンの『黄金史』の記載によると、オルトハイ・ボヤント・ノヤンには12子がいた⁴。しかし、『大黄史』⁵には、ハルハと関係ある二子息、イルデン(Ildeng)とダラの系譜のみが記録されている。この二人と彼らの後裔は、セツェン・ハーン部の付近に遊牧するとともに、彼らと代々にわたり婚姻した。月日のたつうちに、これらのホルチン人はモーミンガン部から離れ、セツェン・ハーン部に付属した。

モンゴル国の学者の調査によると、現在のモンゴル国のフブスグル県に、少なからざる "ミンガン"人が居住しており、ゴビアルタイ県に"イフ・ミンガン"が居住し、ホブド県に "ミャンガド"が住んでいるが、これらがモーミンガンを指しているか否か、さらに一歩進めた考証をする必要がある。

1. 2. アバハナル

16世紀中期、ハルハ万戸の勢力が西へ前進し、当時、オノン、ケルレン河流域に遊牧していた、チンギス・ハーンの異母弟ベルグテイの後裔の属部は、ハルハの勢力範囲内に入った。ベルグテイ17世孫バヤスホ・ブルグド(Bayasqu bürgüd)には二子があり、長男ノム・テメゲトゥ・ハーン(Nom temegetü qayan)。はアバハナル部の始祖である。ノム・テメゲトゥの死後、その子孫は彼のハーン号を継承しなかった。これは、アバハナル部がハルハに従属したことと関係があると思われる。セツェン・ハーン・ショロイの従祖父ダライ(Darai)はノム・テメゲト・ハーンの姉を娶り、ショロイの伯父ドルチャハイ(Dorčaqai)はノム・テメゲト・ハーンの姉を娶り、ショロイの伯父ドルチャハイ(Dorčaqai)はノム・テメゲト・ハーンの娘アンホライ(Angqulai)を娶り、一方、ショロイの妹ブイライ・アバイ(Buyilai abai)はノム・テメゲト・ハーンの孫に嫁した「。以上の諸事は、すべて、アバハナルとセツェン・ハーン家の間の、代々にわたる婚姻の頻繁さを証明するに足る。

アバハナルとハルハの関係については、『清内閣蒙古堂档』の中に、極めて重要な档案資料がある。すなわち、学者たちが、さまざまな場合に何度も引用したことがある"ハルハ・セツェン・ハーンのオンニョード・エルク・ムグイン・タイジ奏折"である⁸。玉芝氏は、そ

⁴ Mergen gegen: *Altan tobči*. Öbür mongγol-un soyul-un keblel-ün qoriy-a.1998 (梅日更葛根著『黄金史』内蒙古文化出版社、1998年)73-74頁。

⁵ Н.П.Шастина, *ШАРА ТУДЖИ. Монгольская летопись XVII века*. Москва — Ленинград, 1957. стр.105.

⁶ 祁韻士『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻之三十七、伝第二十一には次子とあるが、誤り。文淵 閣四庫全書本。

⁷ 詳しくは、前掲「喀尔喀车臣汗硕全家族及其姻亲」を参照。

⁸ Dayičing gürün-ü dotuyadu yamun-u mongyol bičig-ün ger-ün dangsa. Öbür mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a. 2006. jiryuduyar boti (中国第一历史档案馆、内蒙古大学蒙古学学院编『清内阁蒙古堂档』共二十二卷、内蒙古人民出版社影印本出版、2006年、第六卷) 49-53 頁。

の博士学位論文において、この文書に対して、比較的水準の高い研究を行った。それによると、アバハナル部の始祖、ノム・テメゲト・ハーンの夫人の一人は、トゥメド部の首長アルタン・ハーンの娘であり、アヨーシ・アバハイと称された。1582年、アヨーシ・アバハイは、自分の息子と属民を伴って、アバガ部のトゥメンダイ・ザサグ、ブフ・ノヤンと一緒に、ハルハ右翼ザサグト・ハーン部のウテフ・イルドゥチ等の人の牧地付近に移動した。1588年、アバガ部は自身の旧牧地に戻った。しかし、アバハナル部の、この一分支は、ハルハ右翼に留まった。ウテフ・イルドゥチとライホルの死後、ザサグト・ハーン・ソバンダイは、これらのアバハナルを併呑した。1662年、ハルハ右翼で内乱が発生すると、彼らは機に乗じて、セツェン・ハーン部に隣接するオノン河一帯の旧牧地に戻った。。

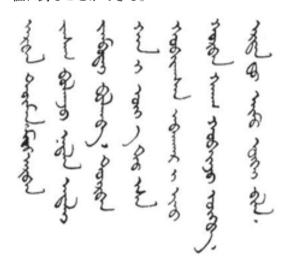
このほか、一部のアバハナル部人は、そのままセツェン・ハーン部に留まり、終始、移動 しなかった。1646年、テンギス (Tenggis) 事件の時、アバハナルはセツェン・ハーン部の 軍隊の主力の一つであった。また、档案資料の記載によると、1664年(康熙三年)、清廷は セツェン・ハーン・バボ (Babu、在位1655~1686年) に勅諭した: "汝に所属する" アバハ ナルのグイェン・ザイサン (Güyeng jaisang) の部は、康熙元年 (1662) にガラバゴビを越え て、漠南のウクルル地方に来到した。康熙三年(1664)、また、その所属のアバハナル・タイ ジのセレン・メルゲン (Sereng mergen) の部がガラバゴビを越えて、ウナチハダ、チャナト ルガイ地方に来た。清廷はハルハとの約定に基づいて、上述の二つの、越境遊牧の人たち 全部を故地に送還した10。グイェン・ザイサンとセレン・メルゲン管轄のアバハナル人がセ ツェン・ハーン所属と称されるのは、道理から見て当然のことである。1664、1665年(档 案には辰年と巳年と書かれる)、ジェブツンダンバ・ホトクト (Jebzündamba qutuγtu) のシャ ビナル (šabinar)、トゥシェート・ハーン (トゥシェート・ハーン・チャホンドルジを指す) とシディシリ (Šidiširi) 等のトゥシェート・ハーン部人が、かつてアバハナル部を襲撃し、 チョクト・エルケ・タイジ(Čoytu erke tayiji)の営地は完全に掠奪された¹¹。思うに、17世 紀中後期のハルハの内乱から、アバハナル部も免れることができず、甚大な損失を被った ようである。

⁹ 前掲「蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究 | 94頁。

¹⁰ Čing ulus-un dotuyadu narin bičig-ün yamun-u mongyol dansa ebkemel-ün emkidkel. Öbör mongyolun arad-un keblel-ün qoriy-a. 2003, 2006. Jiryuduyar boti (『**清内秘书院蒙古文档案汇编**』共七**辑**, 内蒙古人民出版社影印出版、2004、2006年、第六**辑**) 261-265頁;同様の内容の詔書も、トゥ シェート・ハーン部のダンジン・ラマのもとに下達したが、"汝の所属" (činu qariyatu) のアバ ハナルとは称されておらず、"汝等の所属" (tan-u qariyatu) のアバハナルと称されており、こ この "汝等" は明らかにハルハを総括的に指している。

¹¹ Dayičing gürün-ü dotuyadu yamun-u mongyol bičig-ün ger-ün dangsa. Yisüdüger boti (『**清内阁蒙古** 堂档』第九卷) 228頁。

一部のアバハナル人が清朝に帰順した後 12 も、なお一千戸以上のアバハナル人が、セツェン・ハーン部に留まって遊牧していた。姓名を記されたタイジには、ゲンドゥン・エルケ (Gendün erke)、アハイ・オバシ (Aqai ubaši)、イェケ・ダイチン (Yeke dayičing)、エルケ・オバシ (Erke ubaši) 等がある 13 。 1686年 (康熙二十五年)、清廷の回賜の礼物の目録中には、依然として、セツェン・ハーン部に所属するアバハナル・タイジの名前が見られる 14 。 1688年、セツェン・ハーン部の十万戸が清朝に帰順したが、その中には少なからざるアバハナル人がいた。この史実は、セツェン・ハーン・ウメヘイ (Ümekei) の奏折の中において、実証に到ることができる。



.....arban tümen-i minu arban jasaj bolbaju nadala adali yambutai bolbaba. Dörben qan-i üy-e-dü ese qubiyaqsan Abaqanar-i-inu urban qauan qubiyaju ögbe. Erten-dü eyimü ügei bile."

わが十万戸を十ザサグに分け与え、[ザサグたちの]地位を我と等しくさせた。 四ハーンの時に分けなかったアバハナルを、三ハーンに分けて与えた。もともとは、このようではなかった¹⁵。

ここでの "四ハーン" とは、セツェン・ハーン部歴代のセツェン・ハーン、すなわち、ショロイ、バボ、ノルブ (Norbu)、アラブタン・イルデン (Rabtan yeldeng) を指している。 "三ハーン" とはザサグト・ハーン、トゥシェート・ハーン、セツェン・ハーンを指している。 つまり、アバハナル人はショロイ・ハーン期から 1688年に至るまで、ずっと、みなセツェン・ハー

¹² D. ゴンゴルは、アバハナル部が1666年に清朝に帰順したと見做している (D.Гопуог: *Qalq-a tobčiyan*, Öbür mongyol-un suryan kömüjil-ün keblel-ün qoriy-a,1990, degedü debter ([蒙古] 徳·共果尔著『**喀尔喀简史』包金钢等转写**、内蒙古教育出版社、1990年、上册)414頁。玉芝は1665、1667年に一部のアバハナル人が清朝に帰順したと見做している (前掲「**蒙元东道诸王及其后 裔所属部众历史研究**」103頁)。

¹³ 祁韻士『欽定外藩蒙古回部王公表伝』卷之五十四、伝第三十八「車臣汗烏黙客列伝」。

¹⁴ Dayičing gürün-ü dotuyadu yamun-u mongyol bičig-ün ger-ün dangsa, Tabuduyar boti (『清内阁蒙古堂档』第五卷), p.270の「康熙二十五年元月到十二月間蒙古納貢回賜档」中に、"セツェン・ハーン部アバハナルのエルデニ・ウイジェン・ノヤン、セツェン・ハーン部アバハナルの弟イルデン・ノヤン"等の人の名が現れている。

¹⁵ Dayičing gürün-ü dotuyadu yamun-u mongyol bičig-ün ger-ün dangsa. Yisüdüger boti (『清内阁蒙古堂档』第九卷),p.82。

ン部の属衆であり、その隷属関係が変更されたことはなかった。しかし、清廷に身を寄せた後、清廷は、かえって無断でアバハナル人を三ハーン部に分け与えた。セツェン・ハーン・ウメヘイは清朝に力弁したものの、効を奏さなかったので、やむなく康熙皇帝に不当を申し立てた。档案中には、康熙皇帝が返答したか否かは記録されていない。

現在のモンゴル国には、アバハナルの部族あるいは姓氏は見られない。しかし、相当数の "アバガ"人がいる。この "アバガ"は、実は、アバガ部のみを指しているのではなく、広義の "アバガ"を指しており、その中にはアバハナル部の後裔も含まれているのである。

1. 3. アバガ

ベルグテイの17世孫バヤスホ・ブルグドの次子タルニ・フデン(Tarni Ködeng)¹⁶は、所部をアバガと号した。タルニ・フデンの長孫トゥメンダイ(Tümendai)は、初めて"ザサグト・ノヤン"号を称し、彼の長男ボダシリ(Bodaširi)はザサグト・セチェン・ジノンと称した。ブダシリの長男トスカル(Tuskar)は、バートル・セツェン・ジノンと称し¹⁷、モンゴル語文書と清代文献中に"ザサグト・ジノン"、"アバガ・ジノン"あるいは"アル部ジノン"等さまざまな称号で現れる¹⁸。清朝とアバガ部との関係は、このトスカル・ジノンから開始している。当時、ノム・テムゲトの子孫は、名声がなく無名であり、政治的業績は平凡であった。しかし、タルニ・フデンの子孫トスカル・ジノンは、ベルグテイ裔の中で最も勢力を具えた者であった。まさにこのようであったため、清朝の漢文文献、例えば『欽定外藩蒙古回部王公表伝』、『藩部要略』等では、アバガ部の始祖タルニ・フデンを兄と、ノム・テムゲトを弟と誤っている。

セツェン・ハーンのショロイ・ハーンの夫人で、八子息の生母であるアハイ・ハトン (Aqai qatun) は、アバガ部のドルジ (Dorji) の娘である。ドルジはショロイのおばトゥンゲルジン・アバイ (Tünggeljin abai) とヤンゴダイ・ジョリグト (Yangyudai joriytu、本名はブフ) との間に生まれた子である¹⁹。1630年八月、リンダン・ハーンはオンニョード三部、アルホルチン諸部、アバガ、アル・ハルハ等の部を征討した。それらのうち、アバガとアル・ハルハ部のみは、リンダン・ハーンと交戦したが、その他の諸部は、風聞を耳にしただけで逃げ、南下してノーン・ホルチンとアイシン国に帰順した。この背景のもとで、アバガ部はセツェン・

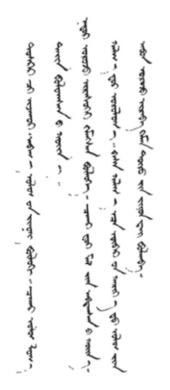
¹⁶ 祁韻士『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻之三十七、伝第二十一には、バヤスフの長子とあるが、 誤りである。

¹⁷ Н.П.Шастина, *ШАРА ТУДЖИ. Монгольская летопись XVII века.* стр. 105.

¹⁸ 前掲 「**蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究**」99頁。

¹⁹ 詳しくは、前掲「喀尔喀车臣汗硕垒家族及其姻亲」を参照。

ハーン・ショロイに身を寄せた²⁰。ショロイがハーンになった所以は、まさにアバガ等の部が身を寄せたことが、その勢力を大いに強大化させたためであった。順治八年に清廷がトスカルに給付した誥命に、次のように書かれている:



"Tuskar či ijaγur Abaγ-a ulus-un jinong bülüge. Čaqar ulus luγ-a dayin boluγsan-u qoyin-a, nadur oruju iresügei kemegsen bülüge. Čaqar-dur mal-iyan abtaγsan-u qoyin-a, Qalq-a-dur oruluγ-a. Basa Qalq-a-ača öber-ün qariy-a-tu ulus-iyan abun oruju irebe kemen törü-yin jiyün wang bolγaba:" ²¹

トスカル、汝はもとアバガ部のジノンであった。チャハルウルス 国と戦争した後、我等に帰附せんと欲した。チャハルに家畜を掠奪された後、ハルハに頼っていった。また、ハルハから部衆を率いて来帰したことにより、多羅郡王に封じた。

ここに、アバガ部が先にハルハに身を寄せた本来の意図が述べられて、十分に明らかになった。

アバガ部が清朝に帰順した後も、まだ相当多くのアバガ人がハルハに留まっていた。モンゴル国の学者ナツァクドルジは、乾隆年間にセツェン・ハーン部の貝勒ワンジル (Vangjil) の旗の管旗章京モーハダイ (Muu qadai) 等の人々が、そのザサグを告訴した訴訟案件について、記述している。モーハダイはベルグテイの後裔であり、その所属のザサグは、彼らのタイジ等級を取り消した。理藩院の調査によると、モーハダイ等の人々は、元来すべて

^{20 1630}年にリンダン・ハーンがアル・モンゴルのハーンを征伐したことについて、詳しくは、前掲「蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究」第三章第二節、および、宝音徳力根、玉芝「1630年のリンダン・ハーンのアル・モンゴル諸部への出征とアル・ハルハについて」(「关于1630年林丹汗出征阿噜蒙古诸部与阿噜喀尔喀」(モンゴル文)『内蒙古大学学報』2007年第4期、92-101頁)を参照。

²¹ Čing ulus-un dotuyadu narin bičig-ün yamun-u mongyol dansa ebkemel-ün emkidkel. Γurbaduγar boti (『**清内秘书院蒙古文档案汇编**』第三**辑**) 295頁。

アバガ・タイジであった。言うところによると、"アル・ハルハ四部の中には、このような所属タイジが非常に多い。彼らの中の一部の人は、ハルハ・タイジたちのアルバト(albatu)となり、さらに一部の人は、普通のソムに編入されて兵役、労役に服している²²。セツェン・ハーン部に留まったアバガ・タイジたちの没落は、これによって一端を見ることができる。今日、モンゴル国に居住しているアバガ人(アバハナル人を含む)は、ドルノド、スフバータル、ドルノゴビ、ドンドゴビ、セレンゲ、ヘンティー六県の十ソムに分布している。それらのうち、少なくともドルノド、スフバータル、ドルノゴビ三県のアバガ人は、もとセツェン・ハーン部の属部の後裔であろう。

2. 戦乱から避けて逃げ入った部族

2. 1. ホーチド

ホーチド (浩斉特 Quučid / Qayučid) は部名としてダヤン・ハーン期に出現し、"ホーチン・チャハル"の略称である²³。ダライスン・フデン・ハーン (在位1548~1557年)の統治期、その直属のオトグをホーチドと称した。17世紀20年代以前にはチャハルの属部であり、すなわちリンダン・ハーンの大本営の成員であった。フデン・ハーンの孫デゲレイ (Degelei) に5子があり、長男がヒタド・ジャガン・ドゥーレン・トゥシェート (Kitad jayan degüreng tüšiyetü) である。チャハル戦乱時代に、ドゥーレン・トゥシェートの妻トゥクイ・ハトン (Tüküi qatun) はホーチド部を率いてショロイ・ハーンに身を寄せた。ショロイはホーチド部を接収したのみならず、トゥクイを妻にして、これを"ジュンゲン・ハトン" (Jönggen qatun) と称した。トゥクイの二子息ガルマ・セワン (Garm-a sevang) とバンディ・メルゲン・チョークル (Bandi mergen čögükür) は、ショロイの継子になり、彼らが支配したホーチド部はそのままセツェン・ハーン部の一つのオトグになった。

これについて、清代モンゴル文档案と史書のいずれにも記載がある。第一の档案は、トゥクイを夫人に封じた誥命である。

"Tngri-yin ibegel-iyer čaγ-i ejelegsen: Quwandi-yin jarliγ: ner-e čola-yi temdegtey-e aldaršiγulqu yosun-inu: erten-ü boγdas qad-un egüsgegsen kauli buyu: ene yerü tumen üy-e-dür kürtel-e ülü yegütgekü bolai: edüge bi yeke orun-dur saγuju ele: erten-ü boγdas qad-un üligeriyer: γadaγ-a-du qatud-un ergükü yosun-i-inu toγtaγabai: Qaγučid-un Tüküi qatun či ijaγur mongγol ulus-un Čaqar qaγan-u aq-a degü. Qaγučid-un Jakan tüšiyetü-yin gergei bülüge: či er-e

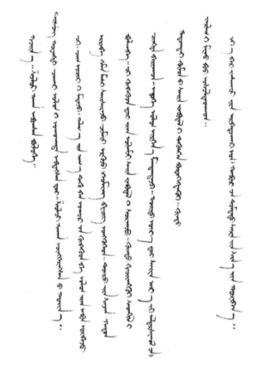
²² Š. Načuydorji, *Qalq-a-yin teüke*. Öbür mongyol-un suryan kömüjil-ün keblel-ün qoriy-a.1997([蒙古 国]那楚克道尔吉『喀尔喀史』内蒙古教育出版社、1997年)374頁。

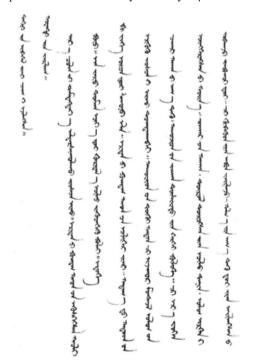
²³ 宝音德力根「**好陈察罕儿·察罕儿五大营·八鄂托克察罕儿」『内蒙古大学学报**』1998年第3期、 1-18頁。

yügen önggeregsen-ü qoin-a. Čaqar-un qaγan törül törügsen-iyen ülü tanin. ulus irgen-i jobaγaju yabuqui-dur: či köbegüd-iyen abun jailaju: Qalq-a-yin aq-a degü-dür-iyen neilegsen-ü qoin-a:

Šoloi qaγan abuγsan bölüge: Taisung quwangdi Čaqar ulus-i ογογada ebdegsen-dür: Šoloi qaγan önggeregsen-ü qoin-a: či. Čaγ učir-yi medejü.

Qalq-a-yin aq-a degü-ben oyur-un köbegüd ba ulus-iyan abun urbaju irebe kemen maši saišiyaju. Čimai ergüjü kaoming bičig öggüged: törü-yin sečen qatun bolyaba: či köbegüd-düriyen ülemji sayin yabudal-i suryaju: kündü kičiyenggüi sedkil-i čing dabariyad: edüge ulus irgen-e maytaydaju: qoitu üy-e-dür sayin ner-e-yi aldaršiyul-un: qatuytai kümün-ü sayin yabudal-i tegüsken bütükegtegüi: köndü jarlay-i minu büü osuldaytun: Ey-e-ber jasayči-yin arbaduyar on. qabur-un dumdadu sara-yin šin-e-yin yurban-a:"





天運を承けた皇帝の詔に曰く:特定の名号とは、すなわち、往昔の聖ハーンが定めた大典であり、往古不変の制度である。今、我は大位を正し、まさに往昔の聖ハーンが定めた大典に倣うべきであり、外藩の福普(夫人)を冊封する制度を定めた。ホーチドのトゥフィ・ハトン、汝は元来、モンゴル国チャハル・ハーンの兄弟ホーチド・ジャガン・トゥシェートの妻である。汝の夫が逝去した後に、チャハル・ハーンが親戚と認めず、国家と人民に災いをもたらしたので、汝は諸子を率いてこれを避け、ハルハの兄弟と合流した。後にショロイ・ハーンは汝を納め[て妻にし]た。太宗

皇帝がチャハルを破り、ショロイ・ハーンが逝去すると、汝は時勢を判断してハルハの兄弟を捨て、諸子とウルスを率いて来帰した。朕はこれを甚だ嘉し、誥命を授け、冊封して多

羅車臣福晋にする。汝は諸子に善を教え、仁孝謙恭の心を尽し、今生で衆に嘉する所となり、 芳名を後世に留め、婦人の道を尽すよう努めよ。朕の至心に違うことがないように²⁴。

『清世祖実録』の記載は、この事実を一歩進めて実証している。順治八年(1651年)正月、"書子式"部落の台吉、噶爾馬撒望、儲護爾が所部一千三百五十人を率いて来帰した²⁵"。同年三月、"皇帝は太和殿に御し、碩雷汗の子、噶爾馬撒望台吉、儲護爾台吉が朝見した²⁶。『実録』は明確にガルマ・セワンとチョークルを"ショロイ・ハーンの子"と記載している。これは、ショロイがガルマ・セワンら兄弟二人の継父であることによる。

トゥフイ夫人がホーチド部を率いてセツェン・ハーン部に身を寄せた時期は、当然、1627年のリンダン・ハーン西征の後である。しかし、正確な年代は、現在、明らかには指摘できない。玉芝氏は、ホーチド部が北遷してハルハに付属したのは1630年冬と見做している²⁷が、さらに考証する必要がある。1635年(天聡九年)十二月、ショロイ・ハーンは、その属下のウジュムチン(Üjümüčin)部のドルジ・セツェン・ジノン、ホーチド部のイルデン・トゥシェート(Yeldeng tüšiyetü)等の大小ノヤンと共に、ウイジェン・ラマ(Üyijeng lam-a)を長とする百余人の使節団を盛京へ派遣して、天聡ハンと和睦した。天聡ハンは使節を派遣した各部の首領に一つ一つ返答した。ホーチド部首領に給わった文書には、次のように述べられている。

"天聡ハンの旨令。エルデニ・ノムチ (Erdeni nomči) に致す。到来した書は悉く知っている。ハルハに帰順するに至った人を、我等はこの遠方にて、どうしてその心を知って、言うべきことがあろうか。ただ汝らが自ら知るのみである²⁸"。

ショロイ・セチェン・ハーンにしたがって清廷へ使節を派遣したホーチド部の首領 "伊勒登土謝図"は、ガルマ・セワンの三叔父、ツェリン・イルデン・トゥシェートである。 清廷が遣使して勅諭したホーチド部長はエルデニ・ノムチであり、ガルマ・セワンの従弟 であり、名をボラトと言った²⁹。

ホーチド部のハルハへの加入は、戦乱、部落の移動、および婚姻関係などの要因が、大部 落の構成中に果たした作用を充分に反映している。モンゴル国の学者の社会調査報告によ

²⁴ Čing ulus-un dotuyadu narin bičig-ün yamun-u mongyol dansa ebkemel-ün emkidkel. Dörbedüger boti (『清内秘书院蒙古文档案汇编』第四辑) 7-9頁。

^{25 『}清世祖実録』(中華書局影印本、1985年) 巻五二、順治八年春正月己酉朔。

^{26 『}清世祖実録』 巻五五、順治八年三月発卯。

²⁷ 前掲「蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究」106頁。

²⁸ 台湾国立故宮博物院『旧満州档』(台湾宮博物院影印本、1969年) 4637-4638頁(モンゴル文). 訳文には『満文老档』漢訳1377頁を参照。

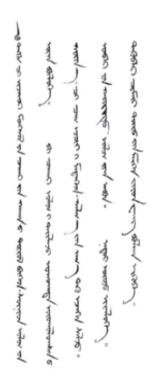
²⁹ 祁韻士『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻之三十五、伝第十九「扎薩克多羅額爾徳尼郡王博羅特列伝」。

れば、現在、ホーチド人は主にモンゴル国のスフバータル、ヘンティー両県に分布している。

2. 2. スニド

スニド (蘇尼特、雪尼特、雪泥。Sönid) 部は、非常に古い歴史をもつモンゴルの部族である。ボディ・ハーン (在位1520~47年) の次子ククチュテイ・メルゲン・タイジ (Kükečütei mergen tayiji) の属部をスニドと称した。リンダン・ハーン期に、スニド部はその統治に不満を抱き、また、戦乱を避けるために、ホーチド部、ウジュムチン部、アバガ等の諸部と共にチャハルから離脱し、瀚海を越えてショロイ・ジノンのもとに頼った。その時期は、リンダン・ハーン西征の $1627\sim1628$ 年の間であろう 30 。

スニド部はショロイに身を寄せ、その他の諸部と一緒にショロイ・ジノンにセチェン・ ハーンの称号を奉った。1641年(崇徳六年)、清廷は、テンギスを封じた誥命文で次のよう に書いている。



"Tenggis či ijaγur mongγol-un Čaqar-un qaγan-u törül büged: Sönid ulus-un noyan bülüge: bi Čaqar ulus-i dailaju ογογuda oruγuluγsan-u qoin-a: či čaγ učir-i medeged: Qalq-a-yin aq-a degüe-čegen salju: öber-ün qariyatu ulus-iyan abun: nadur oruju irelüge: tegüber čimai törü-yin mergen jiyün wang bolγan ergübe:"

汝、テンギスは、モンゴル・チャハル・ハーンの一族であり、 スニドのノヤンである。朕はチャハル国を滅ぼし、汝は時勢 を判断して遂にハルハの兄弟から離れ、所属の民を率いて来 帰した。ゆえに、汝を封じて多羅莫爾根郡王となす³¹。

³⁰ 詳しくは、**齐**木德道尔吉「**腾吉思事件**」『明清档案与蒙古史研究』第二**辑**,内蒙古人民出版社、 2002年、108-109頁を参照。

³¹ Čing ulus-un dotuyadu narin bičig-ün yamun-u mongyol dansa ebkemel-ün emkidkel. Nigedüger boti (『**清内秘书院蒙古文档案汇编**』第一**辑**) 312頁。

この詰命は、ホーチド、ウジュムチンの首領を封じた誥命文の内容と異なるところがある。ここには、"チャハル・ハーンがその国に暴虐であり、宗族を蹂躙したため、ハルハに居を避けた"等の語句がない。これは、スニド部がセツェン・ハーン部に入った詳細な事情が、ホーチド、ウジュムチンと相違することを意味しているのか否か? 1635年(天聡九年)、ショロイ・セツェン・ハーンはアイシン国と善隣関係を築き、セツェン・ハーンの使節団の中には、スニドのバートル・ジノン(Bayatur jinong)の使者がいた。当時、天聡ハンは、セツェン・ハーンとその属下の諸部の首領に逐一返答し、それらの文書は今日に至るまで伝えられているが、唯一、スニド部のバートル・ジノンに返信を与えたという記載はない。

スニド部は、セツェン・ハーン部に居を避けた時、清朝と相互の往来を保持していた。例えば、1638年、スニド部の呉善葉爾登、台吉塞冷、達爾馬等がウジュムチンのドルジ・セツェン・ジノンにしたがって盛京に来て、各々、馬、ラクダ、鞍、甲冑等の貢物を献じた32。十二月、スニド部の巴克察爾塔布嚢、俄斉爾等が来貢して献上物を奉った。清廷は彼らに彩緞、銀両、布匹を各人に応じて授けた33。続いて、スニド部人が散発的に来て、清朝に帰順した。例えば、1639年五月、莽古斯台吉、俄爾泰台吉、僧格等が属下を連れて清朝に来帰した34。この年の冬、スニド部の首領騰機思、騰機特(Tenggitei)等が部衆を率いてハルハから南下し35、清朝に帰順した。しかし、スニドとハルハの関係は、これによっては決裂しなかった。1646年、ショロイ・ハーンは再びテンギス等をハルハに呼び戻した。しかし、ハルハには対抗する力がなかったので、スニド部は1648年に清朝に帰順した。

テンギス事件の後、スニド部人は全部、清朝に帰順したようである。今日のモンゴル国 には、スニド姓氏は見出されない。

2.3. ウジュムチン

ウジュムチンは、蒙元期のモンゴル諸部の中に見出されず、北元期に形成された部族であると思われる。ボディ・ハーンの第三子オンゴン・ドラル (Ongyon durqal) がウジュムチン・オトグを支配した。オンゴン・ドラルには5子があり、年長の4子が早世し、末子ドルジ・セツェン・ジノン (Dorji sečen jinong) は長兄の子セレン (Sereng) を連れてチャハルから離反し、ショロイのもとに身を寄せた³⁶。崇徳帝がドルジ・セツェン・ジノンを封じた誥命の中に、次のように述べられている。

^{32『}清太宗実録』(中華書局影印本、1985年) 巻四○、崇徳三年二月辛酉。

^{33 『}清太宗実録』巻四四、崇徳三年十二月丁巳。

^{34 『}清太宗実録』卷四六、崇徳四年五月辛酉、乙亥。

^{35 『}清太宗実録』 巻四九、崇徳四年十月庚寅。

³⁶ 祁韻士『欽定外藩蒙古回部王公表伝』卷之三十四、伝第十八「鳥珠穆沁部総伝」。



"Dorji či ijayur mongyol-un Čaqar-un qayan-u törül büged: Üjümüčin ayimay-un noyan bülüge: Čaqar-un qayan-u törül törügsen-iyen ülü tanin: ulus irgen-i jobayaju: törü-yi ebden yabuqui-dur: či jayilaju Qalq-a-yin aq-a degü-degen neilegsen bölüge: bi Čaqar ulus-i oruyuluysan-u qoin-a: či čay učir-i medeged: öber-ün qariyatu ulus-iyan abun: nadur oruju irelüge: tegüber bi čimai jasay-un sečen činwang bolyan ergübei:"

汝、ドルジは、モンゴル・チャハル・ハーンの一族であり、 ウジュムチンのノヤンである。チャハル・ハーンが親戚と 認めず、国と民を蹂躙し、国政を破壊したため、汝はこれ を避けて、ハルハの兄弟に合流した。後に朕がチャハル国 を征服すると、汝は時勢を判断し、遂に所属の民を率いて 来帰した。ゆえに汝を冊封して多羅啅里克図郡王となす³⁷。

ウジュムチンの移動は、明らかにリンダン・ハーンの戦争と関係がある。時期は1620~30年代である。帰服後のウジュムチン部は、ケルレン河流域で遊牧した。1635年、セツェン・ハーンはアイシン国と正式に外交関係を結び、ウジュムチンのドルジ・セツェン・ジノンは、セツェン・ハーンのショロイと共に、最初に天聡ハンに遣使した。1637年から、ウジュムチンのドルジ・セツェン・ジノンは、ホーチド部、スニド部と一緒に清廷に遣使した。そして、当年末に部を率いて清朝に帰順した38。1641年(崇徳六年)と1642年(順治三年)に、それぞれウジュムチン左右翼両旗が立てられた。

モンゴル国の人類学者たちのフィールド調査によると、今日、モンゴル国内にはウジュムチンの姓氏はない。おそらく彼らはハルハから完全に離れ去ったと見られる。

3. 漠南モンゴル諸部がセツェン・ハーン部に帰服して生じた影響

1620~30年、漠南モンゴル諸部の往復移動は、セツェン・ハーン部のみならず全ハルハ・モンゴルおよび当時の政局、すべてに対して、甚大かつ永続的な影響をもたらした。

(1)ハルハ部族の形成に重大な影響を果たした。漠北ハルハの祖ゲレセンジェ(Geresenje)が諸子を分封した時、ハルハの主体部族は13あった。すなわち、ウネード(Önegedあるい

³⁷ Čing ulus-un dotuyadu narin bičig-ün yamun-u mongyol dansa ebkemel-ün emkidkel. Nigedüger boti (『清内秘书院蒙古文档案汇编』第一辑) 303-304頁。

^{38 『}清太宗実録』巻三五、崇徳二年五乙酉、巻三九、崇徳二年十一月丁丑。

はウシン)、ジャライル (Jalayir)、ベスド (Besüd)、エルジキン (Eljigen)、ヘルード (Kerüd)、ゴルロス (Γorlus)、ホロー (Qoroyo)、フレー (Küriy-e)、チョーホル (Čoyoqur)、フフイド (Kükeyid)、ハタギン (Qatagin)、タンゴード (Tangyud)、サルトール (Sartayul)、オリヤンハン (Uriyangqan) である。それらのうち、ゲレセンジェ第四子で、セツェン・ハーン部の祖、アミン・ドラルには、ホロー、フレー、チョーホルの三オトグが分与された。アミン・ドラルの孫ショロイの時代、ゲレセンジェの第五子ダライのウムチ (ömči) であるフフイド、ハタギンの2オトグを継承し、セツェン・ハーン部の主体部族を形成した。セツェン・ハーン部の管轄地のみならず、16世紀中葉の全ハルハ・モンゴルの主体部族中にも、上述の漠南モンゴル部族はいなかった。

しかし、モンゴル国の学者の調査によると、現在、もとのセツェン・ハーン部の牧地のみならずモンゴル国全国の領域内にも、多数のアバガ、ホーチド等の部族が居住している。これらの部族は、当然、1620~30年代に漠南地区から流入したものであり、彼らは、あるいは単独で一つの部族であり、あるいは他族と融合してハルハ領域内の固有部族と共に今日の"ハルハ部族"を構成し、現在のモンゴル国の部族の構成に重要な作用を引き起こした。

(2) ハルハの政局に甚大な影響をもたらした。17世紀初めより、ショロイがハルハ・モンゴルの重大な会盟と重要な政治活動の中に現れた。少なくとも1616年以前に、ショロイは前後して"ジノン"、"ホンタイジ"及び"セツェン・ホンタイジ"の称号を有し、アミン・ドラル一族の政治的代表であり、左翼"四和碩"39の首領の一人であった。彼はアミン・ドラル裔の中で唯一の男系子孫であり、かつ、ゲレセンジェの第五子ダライに嗣子がなく、彼の家産をアミン・ドラルの後裔、すなわちショロイが接収・管理した。かくて、ショロイは、ゲレセンジェの7子息の取り分のうち2子の取り分を有し、左翼統治集団中において際立って抜きん出た人物であり、左翼の政治動向に影響を与えていたが、当時、彼は依然として"ホンタイジ"あるいは"ジノン"であり、"ハーン"号を有していなかった。

1620~30年に戦乱を避けて逃れた大部分のチャハルとアバガの部民は、ダライ・ジノン―ショロイに身を寄せた。ショロイは一時に名声と勢威が高まり、自己の所属、および、逃れて流入した漠南モンゴルの部衆に推戴され、ハーンと称した。そのハーン号の全ての称号は"共戴馬哈撒嘛諦車臣汗"であり、ハルハ史上、第四のハーン号を有する者となった。それ以降、セツェン・ハーン部が正式に形成され、ハルハは正式に三つのハーン部に分離した。ショロイも左右ハルハ政局の最も影響力を持つ人物の一人になった。ショロイの

^{39 &}quot;左翼四ホショー"は、ゲレセンジェの第三子ノーノフ及び第四子アミン・ドラルの後裔から構成された兵民合一の組織である。ゲレセンジェの第三子ノーノホの長子アバダイ、次子アボホ・メルゲン、四子トゥメンケン・フンドゥレン・チョーフル及びゲレセンジェの第四子アミン・ドラルの後裔を包括して核心としたハルハ左翼貴族集団である。

子孫も"セツェン・ハーン"の地位で、代々、ハルハ・セツェン・ハーン部を統治した。

(3) ハルハの内乱を引き起こした。漠南モンゴルの流入はハルハで大きな高い波を引き起こした。ハルハ貴族は、逃げて流入した人々を争奪するために、内乱を発生させ、左翼で有力なホンタイジ・ツォクト(Čoytu)は、これによってハルハから追い出された⁴⁰。ツォクト・タイジはハルハから離れて西へ進み、途中で青海のトゥメド・モンゴル人を打ち負かして青海を征服し、属部と青海地区のモンゴル人に"ツォクト・ハーン"と共戴された。彼は、青海トゥメド・モンゴル人を滅ぼし、自己の宗教的立場を表明したため、当時のチベット宗教分派闘争の中に巻き込まれるのを免れることが避けられなかった。ツォクト・タイジは、後蔵のツァンバ・ハーンらが樹立した反ゲールク派連盟に加入し、チベット仏教のゲールク派に攻撃と迫害を行った。1635年、自分の子息アルサランを派遣してチベットに入らせ、ゲールク派を保護する勢力を滅ぼそうと試みたが、1637年、グーシ・ハーンが率いる西モンゴルに打ちまかされた。

漠南モンゴルの北遷によって引き起こされた"ツォクト·タイジ事件"は、ハルハの政局、 漠西モンゴルの政局のみならず、蒙蔵関係方面まで、すべてに非常に大きな影響を引き起 こした。

(4) ハルハとモンゴル大ハーンの関係が敵対態勢に向かった。モンゴル大ハーンに所属する一部の漠南モンゴルがハルハへ逃げて流入し、さらにチンギス諸弟の後裔が統轄するアル・モンゴル諸部とアイシン国との往来が密接になったことにより、反チャハル連盟が結成された。これによって、1630年八月、リンダン・ハーンは出兵して、上述の部族を征討した。記録によれば、当時、リンダン・ハーンは自己の直属の部衆、及び、漠南モンゴルの右翼各万戸軍を移動させて、オンニョード三部、アルホルチン(Aru qorčin)諸部、及びアバガ、漠北ハルハ等の部を征討した。それらの中で、アバガと漠北ハルハのみがリンダン・ハーンと交戦したが、オンニョード三部、およびアルホルチン、四十等の部は、風間を耳にしただけで逃がれ、南下してノーン・ホルチンとアイシン国に帰順した。リンダン・ハーンと交戦したのは、セツェン・ハーン部に頼ったアバガ部、および、漠北ハルハであったが、玉芝氏の分析によれば、交戦した"アル・ハルハ"とは、セツェン・ハーン部を指している41。ハルハ東部のセツェン・ハーン部以外にも、史料の記載によると、1629年と1631年、リンダン・ハーンは、漠北ハルハ右翼ザサクト・ハーン部、および、それに所属するホトゴイド部を攻撃した。ロシア語文書の記載によると、リンダン・ハーンは1629年に30人の使節団を派遣して、ハルハ・ザサクト・ハーン所属のアルタン・ハーン(Altan

⁴⁰ 詳しくは、**乌云毕力格「绰克图台吉的历史与历史记忆**」(*Quaestiones Mongolorum Disputatae*, Association for International Studies of Mongolian Culture 第一輯、東京、2005年)を参照。

⁴¹ 詳しくは、前掲「蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究」を参照。

qaγan) の牧地に到らしめ、"チャハル・ハーンと一緒に合わさり、さらに兵馬を強壮にする" よう要求した。

アルタン・ハーンの拒絶に遭った後、リンダン・ハーンは出兵してアルタン・ハーンのへムチク河(エニセイ河右岸支流)流域の遊牧地を占領し、彼を、長年住み慣れた牧場から5日行程の地方に遊牧せざるを得ないようにさせた⁴²。まさにリンダン・ハーンの脅威によって、アルタン・ハーンはロシアに助けを求め、自己の親属を派遣して自己とハーン部を代表してロシア皇帝に"忠誠を尽す"ことを宣誓し、ロシア=モンゴル関係は一つの新しい歴史時期に入った。

元来リンダン・ハーンは、ハルハ諸ハーンと同族であり、かつ左翼セツェン・ハーン部のショロイと相婿関係であった⁴³。しかし、部民の争奪、所属権問題により、ハルハとモンゴル大ハーンとの関係は緊張に、さらには敵対的態勢に向かったのであった。

(5) ハルハ=清朝関係の方面への影響。 漠南モンゴル諸部は、ハルハとアイシン国―清 朝との相互の間を移動し、繰り返し所属関係を変更したため、セツェン・ハーン・ショロイ は機会をとらえて、スニド部のテンギスを、策動して謀反させ、ハルハと清朝との最初の 大戦を引き起こした。清廷は高度に重視し、強力な軍勢を派遣して征討した。ハルハ方面 では、セツェン・ハーン部を首とする左翼連合軍が、積極的に迎撃した。最終的に、ハルハ 方面は利を失い、セツェン・ハーン・ショロイとトゥシェート・ハーン・グンブはセレンゲ 河へ逃げていった⁴。事件の後、セツェン・ハーン・ショロイはロシアに使節を派遣して協 力を求めたが、果たし得ず、最終的に内憂外患のうちに逝去した。"テンギス事件"は、ハ ルハ=清朝関係の一つの重大な転換点であり、事件は双方の態勢に平衡を失わせた。すな わち、清朝側には先んずる機会を占めることができたが、一方、ハルハは極めて受動的な 状況に陥った。清廷は、この機会を利用して、ハルハに非常に大きな圧力を加え、何度も遺 使してテンギスら逃亡者を返すよう要求し、そして、ザサグト・ハーン部に所属するバル ボ・ビント (Balbu Bintü) 45がバーリンの人畜を掠奪したことと、オンブ・エルデニ (Ombu Erdeni、すなわち、第二代アルタン・ハーン) が帰化城を侵略襲撃したこと等の問題に対し て、広範囲に及ぶ対決的協議を進めた。最終的に、ハルハの諸ハーン、ノヤンに宣誓させ、 "九白の貢"を納めさせ、あらためて"八大ザサグ"を認定した。 これら一連の妥協は、ハル

⁴² 兹拉特金主**编**, 戈利曼、斯列**萨**尔丘克著, 马曼**丽**、胡尚哲**译『俄蒙关系历史档案文献集**』上册(**兰** 州大学出版社, 2014年), 第84号、95号文献。

⁴³ 詳しくは、姑茹**玛**、鳥雲畢力格「**硕垒称汗考**」(『内蒙古大学学報』2008年第2期、37-41頁)を参照。

⁴⁴ 詳しくは、**齐**木德道尔吉「**腾吉思事件**」『明清档案与蒙古史研究』第二**辑**、内蒙古人民出版社、 2002年、106-146頁)を参照。

⁴⁵ ゲレセンジェの第六子はデルデン・クンドゥレン、その長子はオーバ・ブフ・ノヤン、その子はガルト、その子はバルボ・ビントである。

ハが清廷に帰服する端緒となり、また、清廷のモンゴルに対する策略の、一度目の重大勝利であったのである。

おわりに

1620、30年代、大量の漠南モンゴルが北遷してハルハに入ったが、それらのうち、セツェン・ハーン部へ逃がれて流入したのが多数を占める。これらのゲレセンジェ家に属さないオトグは、当時のセツェン・ハーン部の部族構成に新しい内包を加え入れ、かつ、今日のハルハ部族の構成に甚大な影響を与えた。同時に、漠南モンゴル諸部の北遷は、ハルハにおいて一連の連鎖効果を引き起こし、一連の重大な歴史事件を発生させ、ハルハの政局に重要な変化を起こした。他方では、ハルハと、モンゴル大ハーン、漠西モンゴル、チベットおよびロシアとの関係に対し、すべてに、少なからざる影響と変化を生じさせた。

セツェン・ハーン部に北遷したこれらのオトグを考察することは、16~17世紀のモンゴル遊牧集団の強大化と弱体化、および、統治する一族の勢力の消長や、世代にわたる婚姻のネットワーク等の情況を理解するのに有益である。さらに重要なことは、当時の満洲 = モンゴル = チベット関係の発展および政局の変化の研究に役立つことである。これもまた、当該の課題を不断に深く掘り下げて探究検討する所以である。

参考文献

〈漢語〉

宝音德力根「**好陈察罕儿·察罕儿五大营·八鄂托克察罕儿**」**『内蒙古大学学报』**1998年第3期, pp.1-18.

姑茹玛「喀尔喀车臣汗硕全家族及其姻亲」Quaestiones Mongolorum Disputatae, Association for International Studies of Mongolian Culture, 第五辑, 东京, 2009年, pp.107-115.

姑茹玛、乌云毕力格「硕全称汗考」『内蒙古大学学报』2008年第2期, pp.37-41.

齐木德道尔吉「**腾吉思事件**」『明清档案与蒙古史研究』第二**辑**, 内蒙古人民出版社, 2002年, pp.108-109.

祁韵士『钦定外藩蒙古回部王公表传』文渊阁四库全书本.

『清实录』中华书局影印本,1985年.

玉芝「蒙元东道诸王及其后裔所属部众历史研究 | 2006年内蒙古大学博士学位论文.

乌云毕力格「绰克图台吉的历史与历史记忆」 Quaestiones Mongolorum Disputatae, Association for International Studies of Mongolian Culture, 第一辑, 东京, 2005年, pp. 196-226.

兹拉特金主编, 戈利曼、斯列萨尔丘克著, 马曼丽、胡尚哲译 『俄蒙关系历史档案文献集』 上册,

第84号,95号文献,兰州大学出版社,2014年.

『旧満州档』,台湾国立故宮博物院(台湾宮博物院影印本,1969年),pp. 4637-4638頁(モンゴル文).

〈モンゴル語〉

Čing ulus-un dotuyadu narin bičig-ün yamun-u mongyol dansa ebkemel-ün emkidkel, Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a. 2003, 2006.

Dayičing gürün-ü dotuyadu yamun-u mongyol bičig-ün ger-ün dangsa. Öbür mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a. 2006.

D.Γonγor, *Qalq-a tobčiyan*, Öbür mongyol-un suryan kömüjil-ün keblel-ün qoriy-a,1990.

Mergen gegen, Altan Tobči, Öbör mongyol-un soyul-un keblel-ün qoriy-a,1998.

Š. Načuydorji, *Qalq-a-yin teüke*, Öbür mongyol-un suryan kömüjil-ün keblel-ün qoriy-a, 1997.

N.P.Shastina, Shara tudzhi: Mongol'skaia letopis' XVII veka, Moskva, 1957.

(中国・内モンゴル大学モンゴル学研究センター)

附記

本稿は、中国教育部人文社会科学プロジェクト「**喀尔喀土谢图汗部研究**」(14YJA850003) の研究成果の一部である。